



閉会の辞

北海道医療大学学長・組織委員会委員長
廣 重 力

第3回日本医学会特別シンポジウム「医とゲノム」を終えるにあたり、組織委員会を代表いたしまして、一言お礼の言葉を申し述べます。

今回の特別シンポジウムには2つの特徴がありました。

第一は、ゲノム解析の分野には全くの素人の私が全体プランを企画することを許していただいたことでもあります。日本医学会の森会長はじめ、小泉・高久両副会長の暖かい寛容の心があってはじめて実現したものであります。この機会を与えて下さいましたことに対し御礼申し上げます。また、実際の企画・運営にあたりまして、直接、間接にご助言、ご協力をいただきました日本医学会事務局の方々にお礼申し上げます。

第二の特徴は、プログラムをゆったりと組んだことでもあります。基調講演と三つのセッションから成り立っていますが、基調講演に100分、各セッションのスピーカーの方々に60分の時間を配し、セッションごとに40分の討論の時間を配分しました。これは当初から、スピーカーの先生方それぞれに「特別講演」をお願いするという計画でありました。この意味では、今回の「特別シンポジウム」は、実際には、「特別講演シンポジウム」を意図したものということができます。日本を代表する演者の先生方は、私どもの意のあるところをお汲み取りいただき、実に個性的な、充実した内容の講演を賜りましたことに、あ

らためて賛辞と敬意を表したいと存じます。また、積極的に各セッションの進行をリード下さり、本会を盛り上げて下さいました司会の大石かずさDNA研究所所長、崎山北大教授、中村北大総長の各先生に感謝申し上げます。

もう一つの特徴をつけ加えることが許されるならば、このシンポジウムは医学のスタンスと言うよりはむしろ「生命科学」の視点を意識して組まれている点であります。

平成11年11月初めに森会長から特別シンポジウムの企画を仰せつかったとき、私はあえて「医とゲノム」というテーマを選びました。21世紀の初頭に、この大きなテーマに挑戦することができたことはまことに幸いであります。このテーマの含むところは奥深く、冒頭の基調講演で榊教授が強調されましたように、それは単に医学・医療・産業に広範なインパクトを与えるにとどまらず、21世紀における人間のあり様、人間に対するより深い洞察へのインセンティブを与えることは間違いありません。最後のセッションをヒトゲノム解析と価値観の変容としたのもこのような思いからでありました。

終わりに、重ねて日本医学会の役員の各位、演者の先生方、ご参会いただいた先生方、また裏方に徹して運営を助けてくださった本間北大教授はじめ統合生理学講座の事務局の方々に御礼申し上げて、閉会の辞といたします。